

句集

秋色の湖

句集

秋色の湖

水村梅里

句集 秋色の湖

昭和六十一年五月一日発行

著者 水村梅里

13 狭山市祇園十六の七
電〇四三九一五九一五三九〇

定価 二三〇〇円

送料 二五〇円

発行所 青流吟社

狭山市祇園十六の七

印刷 斉藤印刷

狭山市上広瀬三七六

序

「人と自然との関り合いを深く見つめて、一切を次の機会に譲りたい」とは、前句集『白い炎』の「あとがき」で、著者みずから述べた所感である。その第一句集発刊から五年を経過したが、「次の機会」がこのように早く到来するとは思ってもしないことであつた。

芦枯れて膝より昏るる水の色

(昭和五十五年)

本句集冒頭の一句。「膝より昏るる」につづく「水の色」は、上五「芦枯れて」に照応し、まさに「人と自然との関り合いを深く見つめて」いる。しかも、遠近法を活かしたイメージには、心理の陰翳と詩人の孤独な抒情を窺うことが出来、この作者の沈潜した詩精神を感じるのである。殊に「水」に対する氏の透明な詩情は、まさに生来のもつと言えよう。

例えば、

晩年が見ゆ秋色の湖据えて

(昭和五十六年)

花菖蒲夕日逃げゆく水の音

(昭和五十七年)

水見えて秋嶺すつくと立ちあがる

(昭和五十八年)

梅白し暮色をさそう水の音

(昭和五十九年)

水音の身近に見えて暮春なる

(昭和五十九年)

等々“水”に因む作品を抽くことは容易である。平安、静謐な境に、自然と人間との関り合いを大切にしたその描き方は、あきらかに梅里俳句の持つ情感ゆたかな詩の世界だ。ながい人生経験によって得た見据え方に惹かれる。

梅里氏の俳句は、まず“見る”ことから出発し、素材をどう消化したらよいか、その見据え方には、氏がつねづね言っていることだが、兎角、花鳥諷詠の域を出らない稚拙さが気になるらしい。しかし、

冬のばら一茎ありて足れりとす

(昭和五十五年)

堰の水色なき風の溢れをり

(昭和五十六年)

己が色ばかりを抱き寒椿 (昭和五十八年)

早春の影のときめき大櫛 (昭和五十八年)

掃けばまた風の落葉が立ち向う (昭和五十九年)

などには、写生眼の確さと共に情意の展開が作者の存在を明らかに主張されていると思う。「冬のばら一茎」に見る氏の写生方法には、花鳥諷詠の世界が試みる執拗なデッサンへの努力が積み上げた技術的な単純化が認められる。「堰の水」は、「色なき風」の季題を眼で踏み込んだ確かな働きによって得たもの。「寒椿」と「大櫛」の両句には、季節感覚の鋭敏な切り込みを感じた。五句目の「風の落葉」には、作者の戯遊の境地を看取ったが、こうした擬人化は、多年の蓄積が遊ばす俳諧味であろう。

なお、写生眼の働きの擬人化へ転化を試みた一例として、

早春の橋脚水より抜けきれず (昭和五十六年)

の作品がすぐ浮かぶ。ようやく春めいて来た日ざしのなかにやや水量を増して来たのだ。春を迎える歓びのうちにも、橋脚のさだめを作者は意識していたのである。

そうした作者の複雑な気持ちが「水より抜けきれず」と、情にほだされたとと言える。

ねじ花の蟻のくすぐりゆるしおり
(昭和五十五年)

ねじ花と蟻の交歓、なにかほえましくもたのしい情趣。「蟻のくすぐり」がうまい。

また、

藻の池の音を沈めし破綻かな
(昭和五十八年)

仙人掌の奇禍のごとくに朱を吐けり
(昭和六十年)

のごとく「破綻」とか「奇禍」のような俳句作品のなかに消化し難い生硬な熟語が散見されることに興味を持った。さらに例をあげてみよう。

朴落葉山に謀叛の兆し見ゆ
(昭和五十五年)

「謀叛」の語に「関の声」が重なって聞こえて来るようだ。「謀叛」の使い方が実に面白いと思ったが、

思わざる枯蟪蛄の拒否に会う
(昭和五十七年)

樺枯れ自若の影をひろげたる
(昭和五十七年)

菊枯れて自愛の刻をすごしおり

(昭和五十八年)

などには、さらにその面白さが倍加する。

即ち「自若」「拒否」「自愛」の堅い熟語がいずれも「枯」の一語によって詩化し得た技倆である。あきらかに平板な自然諷詠を脱出しようとする意志が働いている効果だ。多年の修鍊によって得た力量は、こうした詩の昂揚性を奮い立たせ、最近作にはまた新しい角度から対象へ向けた詩眼の幅広い情感のたぐりを察知するのである。

逃げるときも肩をいからせ羽拔鶏

(昭和五十九年)

子子の音を盗みて沈みけり

(昭和五十九年)

あめんぼう自在と云うもおろかなる

(昭和六十年)

こうした作品に見る動物への愛憐は、今までの氏の作品にはめずらしいことである。老境に入った己れに擬したものと思えるが、「羽拔鶏」「子子」「あめんぼう」の生熊描写には見逃しがたい「生への愛憐」が窺える。

これらの作品からすぐ思い出すことがある。前句集の「子子のいのち刻める昼し

ずか」と言う句。「音を盗みて沈みけり」の詩境に到達し得た軌跡に、人生の年輪を看取った。また、前句集の「寒鴉図太く生きて振り向かず」と云う句。「羽拔鶏」や「あめんぼう」に見る哀憐の情は、「図太く生きて」の直情的詠法にはない。生への愛憐をしみじみと味わせてくれる。平明且簡潔な敘し方にこそ達意があり、觀照の深さがあるのだ。

本句集の上梓を祝すと共に、梅里氏の御発展を祈ってやまない。

昭和六十年十一月

大倉山の麓にて

河 野 南 畦

目次

序	河野南畦	一
枯 芦	昭和五十五年十月より 昭和五十六年	一〇二句 九
初 裕	昭和五十七年	一〇八句 四五
春の夕	昭和五十八年	九〇句 八三
寒牡丹	昭和五十九年	一〇二句 二五
花の闇	昭和六十年	九三句 一五一
後 書		一八五

枯

芦

一
〇
二
句

昭和五十五年十月より
昭和五十六年

芦 枯 れ て 膝 より 昏 る る 水 の 色

神 楽 笛 折 目 正 し き 杉 木 立

母 子 像 の 嬰 の 眼 は 遠 し 秋 の 天

銀杏散るおなじ愁いを打ち重ね

破れ蓮や下馬の立札真新し

冬のばら一茎ありて足れりとす

冬
夕
焼
と
り
残
さ
れ
し
古
墳
村

朴
落
葉
山
に
謀
叛
の
兆
し
見
ゆ

焚
火
し
て
男
の
臭
い
か
き
立
て
る

若狭路や狭間はざまの風光る

若狭路三句

魯田に入江の光およびきし

冬麗や一日光る操舵室